

## ドイツの英語教育に見る早期英語教育

水谷 友香理

現在、日本では小学校5年生から「外国語活動」として、英語教育が必須となっている。そして、東京オリンピックが開催される2020年までの導入を目指し、小学校3年生から英語教育を開始する方針が固められた。これは、初等教育の早い段階からグローバル化に対応した教育を充実させることで、世界に通用する人材を育てることが目的である。しかし、このような早期英語教育に対しては、賛成意見だけでなく反対意見も挙がっている。そこで、早期英語教育のメリットとデメリットを考えていきたい。

早期英語教育のメリットとして、まず一番に挙げられるのが、聞き取る・話すといった実践的な英語が身に付くことである。早期英語教育の場合、通常は単語を覚えさせたり、文章を読んだり書いたりさせることよりも、英語の音を耳で聞かせることを重視した授業が行われる。それに加え、子どもには英語への抵抗感が少なく、英語の発音を恥ずかしがることも少ないため、実際に話しながら実践的な英語を学ぶことができる。また、一般に多くの日本人が苦手とする“r”と“l”、“c”と“k”といった発音の区別ができるようになる可能性が高い。これは、臨界期までは子どもの吸収力が特に高いからである。臨界期とは、主に生後から12歳ぐらいまでの期間のことで、この期間に英語を聞くことによって、微妙な音の違いをより正確に聞き分け、聞こえた音をほぼそのまま再現して発音できる期

間のことである。しかし、これは「臨界期仮説」とも呼ばれ、定説とはなっていない。そのため、このことについてはさまざまな意見が挙げられている。第二言語の習得に関して、年齢が重要な要素となっていることはほぼ確かだが、はたして臨界期というもの本当に存在するのか、また存在するとしたら、それはいつなのか、といったことについて長い議論が繰り返されており、まだ仮説の域を出ていない。

一方で、早期英語教育のデメリットは、英語を学ぶのが早すぎると、母国語である日本語の発達が遅れてしまう可能性があるということだ。言語学習で最も大切なことは、考えを伝えるための読解力を身に付けることである。そのため、日本語でさえもまだ十分に話せない年齢の子どもが英語を学ぶと、逆に害になってしまう恐れもある。

ある研究によると、3歳から6歳で英語圏に移住した子どもの英語の能力は、最初は早く伸びるが、その後は穏やかで、現地の子どもたちの平均的な水準に達するのに11年以上もかかった。それに対して、9歳頃まで日本語でしっかり教育を受けてから英語圏へ移住した子どもは、約3年で現地の子供たちの平均的な水準に達していた。つまり、日本語で考える力の土台をしっかり作っておけば、英語もスムーズに吸収できる、と言えるのである。これは、文法や語彙が違っていても、抽象的な思考力などは共通しているため、と考えられている。

早期英語教育のメリットとデメリットが

分かったところで、次にドイツの教育制度について紹介したい。

ドイツの教育制度は日本とは大きく違っている。義務教育は、「基礎学校 (Grundschule)」と呼ばれる6歳から10歳の4年間で、そこを卒業すると、職業学校へ進学するか、高等学校へ進学するかを選択しなければならない。これは、日本では中学校・高等学校にあたる。つまり、ドイツでは10歳の時点で自分の将来について考え、進路を選択する必要がある。

職業教育は、5年間の「基幹学校 (Hauptschule)」と6年間の「実科学校 (Realschule)」と呼ばれる2種類の学校がある。基幹学校へ進学した場合、高等学校への編入は非常に困難で、この学校の生徒は卒業後、すぐに就職する。そのため、15歳前後で労働者として働き始める。一方、実科学校は基幹学校と同じような実務訓練に加えて高等教育準備も行われている。そのため、高等学校へ進学したくても学力の問題などによって進学できなかった生徒も在籍している。卒業後は、高等学校編入試験の受験資格が与えられる。しかし、よほどの成績優秀者でなければ編入試験の合格は困難である。そのため、合格できなかった場合、若者労働者として、社会に出ていくことになる。

高等教育は、8年間で、「ギムナジウム (Gymnasium)」と呼ばれる。これは、日本では中高一貫校にあたり、入学には一定の学力が必要とされる。また、入学できたとしても、入学後の授業もとても厳しく、留年することも珍しくはない。その一方で、飛び級制度も設けられており、成績が優秀であれば、飛び級し、早く卒業して大学へ進

学することも可能である。

ギムナジウムでは、自然科学系と言語系の2種類から自分の好きなコースを選択することができる。自然科学系のコースでは、情報 (Excel、E-mail など) や化学が必修科目となっている。言語系のコースでも、一般教養として、化学が必修科目とされている。言語教育については、自然科学系は2言語、言語系は3言語学ぶ。一つ目は英語、二つ目はラテン語かフランス語の2言語から選択することができる。そして、言語系のコースの場合、三つ目として、スペイン語を学ぶ。

ギムナジウムの最終学年になると、アビトゥーア (Abitur) の受験資格が与えられる。アビトゥーアとは、ドイツ・フィンランドにおいて、国内およびヨーロッパ各国での、大学へ進学するための資格試験である。ドイツでは、2回まで受けることができる。このアビトゥーアは、国家資格であるため、一度取得すると一生使うことができる。また、大学への入学のときだけではなく、就職の際にも用いられる大事な資格である。

ドイツでは、日本と違って、大学進学の際に個別試験が行われるケースはほとんどない。そのため、アビトゥーアの点数の条件さえ満たしていれば、自分の好きな大学の好きな学部に入学することができる。途中で学部を変えたり、別の大学へ編入することもできる。しかし、人気のある学部は定員制を設けているところもあり、人数が多いと入学を待たされることもある。

さて、いよいよ今回の本題にも関わってくる、ドイツの英語教育についてみていきたい。

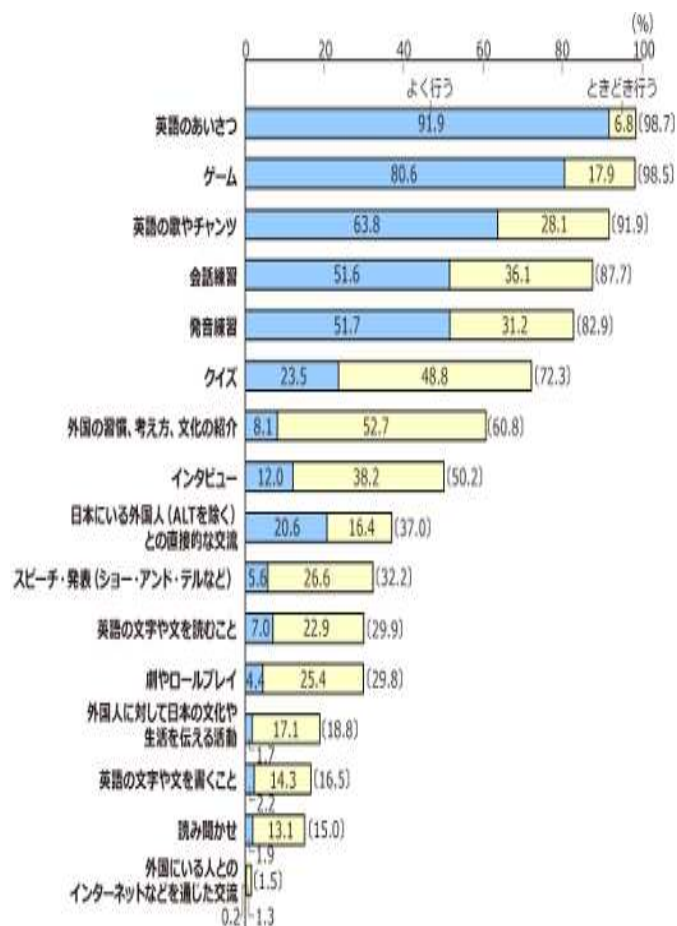
ドイツでは、16の州それぞれで異なる教

育システムが行われている。そのため、英語教育を始める年齢もそれぞれの州で異なっている。ほとんどの州で、8歳から9歳の間、すなわち基礎学校に通っている間に英語教育が実施されている。基礎学校での英語教育の平均的な授業数は、週2時間程度である。全ての州で英語は履修言語とされている。それに加えて、約半数の州では、英語に加え、フランス語も履修言語に指定されている。

基礎学校で行われている英語の授業は、主に外国語学習への関心を高めることや、国際理解や異文化コミュニケーションを体験する、といったことを目的として行われている。教師は、アルファベットの書き方を教えたり、文法を教えたりするのではなく、初めから全て英語を使って、生徒に対して質問や指示を行う。つまり、ドイツの基礎学校での英語教育は、「聞く」・「話す」といった能力を身に付けることを重視している。そして、年齢の低い児童が楽しみながら英語を学ぶことができる環境がつけられている。

現在、日本でも小学校5年生から「外国語活動」としての英語教育が必須となっている、と冒頭で述べた。そこで、今度は日本の「外国語活動」の授業内容についてみていきたい。日本での小学校外国語活動について、文部科学省は「音声を中心に外国語に慣れ親しませる活動を通じて、言語や文化について体験的に理解を深めるとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標として行う」（小学校外国語活動サイト：文部科学省）としている。

具体的な授業内容としては、英語でのあいさつ、ゲーム、英語の歌などが挙げられる。（グラフ参照）



この小学校での外国語活動については、問題点もある。それは、英語の教員免許を持っている教師（ALTを含む）が授業を行うのではなく、英語の教員免許を持っていないそれぞれのクラスの担任が英語の授業を行っている点である。これには、英語の指導を専門としない教員が英語を教えることによって、生徒とともに成長していき、それに伴って生徒のやる気を上げさせる、という意図がある。しかし、やはり英語の指導については素人である教員が指導を行うことに問題があるとして、この制度につ

いては異論もある。

今回、私は先ほど説明した、ドイツの高等学校・ギムナジウムへ行くことができた。ギムナジウムは、アウクスブルク市内だけでも70校ある。今回、私が行かせていただいたギムナジウムは、正式には、ルドルフ・ディーゼルギムナジウムという名前で、生徒数は約1060名、そのうち約600名が男性である。



ギムナジウム内の様子

このギムナジウムで、第9学年の英語の授業を見学することができた。授業は、全て英語で行われており、板書も全て英語で書かれていた。



授業後の黒板 全て英語で書かれている

何よりも驚いたのは、流暢な英語を話す生徒が多い、ということだ。そして、印象

に残っているのは、ある一人の生徒が先生の質問に対して、ドイツ語で答えた。すると、先生は英語で「この授業では、英語だけを話してください。」とその生徒に指示をしていたことだ。

今回の派遣で私が出会ったドイツの方々は、私のホストファミリーをはじめとして、ほとんどの方が流暢に英語を話していた。これは、早い段階から英語を学び、しかも全て英語で行われている授業を受けてきたからなのだろうか。もしそうだとすると、日本においても、早期英語教育の効果は十分に期待できる。

しかし、早期英語教育は、場合によってはただ英語が流暢に話せるようになる、という効果しかもたらさないだろう。早期英語教育の導入によって、日本が目指している「世界で通用するグローバル人材」というのは、ただ単に英語が流暢に話せる人のことを指すのではない。真のグローバル人材に求められるものとは、出身国や文化的背景などが異なる多様な労働環境の中で、相手と自分のさまざまな違いを理解して、受け入れることができる能力である。そして、どんな状況でも、自分のスキルを最大限に発揮しようと努力し、ともに協力して仕事を成し遂げる力を持っていることも重要な要素の一つである。英語は、互いにコミュニケーションをとるための道具ではない。

今、ますますグローバル化が進み、これに対応できる人材を育成するための教育を行うことが求められている。その一環として提唱され、始められたのが、早期英語教育である。しかし早期英語教育は、指導の内容次第で、子どもたちにとって良いもの

にも悪いものにもなる。グローバル化に対応した教育の本質は、自国の文化に根差した多様な価値観の獲得である。外国語学習には、母語を理解する意味も含まれている。つまり、ただ英語を教えるだけでは、世界に通用するグローバル人材は育たないということだ。これからは、英語教育の実施年齢を早めていくだけではなく、英語の文化や歴史などを含めた総合的なカリキュラムの開発が必要である。

< 引用・参考文献・URL >

- ・ 小学校 3 年生からの英語教育、本当に効果あるのか？

<http://www.huffingtonpost.jp/2013/10/22/start-english-education-at-the-third>

- ・ サンライスキッズエデュケーション

初めての英語教育

早期英語教育のメリット・デメリット

[www.sunrisekids-education.jp/useful/first\\_edu/02.html](http://www.sunrisekids-education.jp/useful/first_edu/02.html)

- ・ ドイツの教育制度

[Katez2.sakura.ne.jp/steiner/d\\_shule.html](http://katez2.sakura.ne.jp/steiner/d_shule.html)

- ・ EF 日本

国別プロフィール-ドイツ

[www.efjapan.co.jp/archive/v2/europe/germany](http://www.efjapan.co.jp/archive/v2/europe/germany)

- ・ ジュニア留学ネット

世界の小学校英語教育事情

ドイツの英語教育事情

[www,junior-ryugaku.net/info/000531.html](http://www.junior-ryugaku.net/info/000531.html)

- ・ 小学校外国語活動サイト：文部科学省  
<http://www.mext.go.jp/a-menu/shotou/gaikokugo/>

- ・ 2014/4/17 読売新聞

『早すぎると弊害も』

内田伸子・十文字学園女子大特任教授

< グラフ >

- ・ <http://benesse.jp/blog/20110324/pl.html/>